

広島・長崎への原子爆弾投下、 2つの街で被爆した人がいた

ヒロシマ・ナガサキ

1945年8月6日8時15分広島市、アメリカ空軍爆撃機B-29エノラ・ゲイ号から投下されたウラニウム原子爆弾「リトルボーイ」は、原爆ドームの東南約160mの地点、上空580mで炸裂し、広島のをを一瞬のうちに破壊つくしました。

1945年8月9日11時2分長崎市、アメリカ空軍爆撃機B-29ボックス・カー号からプルトニウム原子爆弾「ファットマン」が投下され、現在の爆心地公園の地点、上空490mで炸裂し長崎のをを一瞬のうちに消し飛ばしました。

1945年の年末までに広島で約14万人、長崎で約7万人が亡くなり、終戦後も、放射線によって多くの人々が苦しめられました。

今号では、80年前に400km離れた両市で被爆した「二重被爆」について掲載いたします。

ヒバクシャ 被爆者 被曝者

核兵器や原子力災害のヒバクには、「被爆」と「被曝」があります。「被爆」は原子爆弾・水素爆弾の爆発による熱線、爆風、放射線の被害を受けたことを表し、「被曝」は強い放射線に曝（さら）され放射線被曝したことを表します。カタカナの「ヒバクシャ」は、広く核兵器の被害や原子力災害などで人体に影響が出る量の放射線を浴びるといった被害を受けた人を表す言葉です。

日本で、ヒバクシャは広島・長崎で原爆の被害にあった方という印象が強いですが、色々な国で、広島・長崎への原爆投下以降も核兵器の実験や原子力発電所での事故などに伴うヒバクシャがいます。

国内では、広島・長崎以降に原子爆弾による被害者がいます。ビキニ環礁での水素爆弾実験により被爆した第五福竜丸の乗組員も核兵器の被害者です。日本は3度核兵器の被害にあっています。また、アメリカの核兵器実験場として使用されたビキニ環礁のビキニ島には人が住んでいましたが、実験が行われる際に避難し、実験が行われなくなった現在でも避難が続いています。これは、アメリカの調査で生活に問題ないとされ一度住民は島に帰りますが、残留した放射性物質により島が汚染されていたため、このとき島へ帰っていた人が被曝してしまいました。このため再度避難を余儀なくされ、早くても島に帰れるのは2052年以降だとされています。

黒い雨・死の灰

原子爆弾が爆発した際、大量の放射性物質を含んだ塵が巻き上げられ、それらが「黒い雨」や「死の灰」として地上に降ってきます。放射能があり地上に降り注ぐこれら塵のことを放射性降下物（フォールアウト）といいます。

広島・長崎では、原爆の中にあった核物質の一部が冷やされたあと、塵が雨に付着し、粘性のある黒い雨として降りました。風があったことから、黒い雨は爆心地ではなく、広島市では西側、長崎市では東側に多く降りました。

1954年にビキニ環礁で核実験が行われた際は、その160km離れたところにいた「第五福竜丸」の船員23名が降ってきた灰（死の灰）により、被曝し1人が死亡しました。降り注いだ灰は周辺で漁獲されたマグロにも取り込まれたた

め、マグロから高い放射線量が検出されました。

また、1963年部分的核実験禁止条約が発効されるまで1950年～1963年の間に大気圏内で行われた核実験により、地球全体にこれらが拡散し、地球全体における大気中の放射性物質の濃度が上がったとされています。

原爆症

原爆の熱線、爆風、放射線による障害は総称して原爆症と呼ばれています。

爆心地からの距離や壁の有無によって異なりますが、爆発後1分以内に放射された初期放射線によって、爆心地から約1kmにいた人は、致命的な影響を受け、多くの人々が数日のうちに死亡しました。外傷なく無傷な人でも、被爆後、月日が経過してから発病し、死亡した例も多くあります。

被爆直後にでる障害を急性障害といいます。その種類は様々で、吐き気や食欲不振、下痢、頭痛、不眠、脱毛、倦怠感、吐血、血尿、血便、皮膚の出血斑点、発熱、口内炎、白血球・赤血球の減少、月経異常などがあります。

原爆症には後障害と呼ばれる後遺症のような症状があり、火傷の治ったあとが盛り上がりケロイド症状が出る。胎内で被曝した赤ちゃんは出生後も死亡率が高く、無事生まれて来ても小頭症などの症状が現れることもありました。

被爆から数年後、白血病やがん罹患する人が増加します。白血病の増加は、被爆から2年～3年後に始まり、7年～8年後にピークに達しています。がんが発生するまでの期間が長く、被爆から5年～10年ごろに増加が始まったのではないかとされています。

二重被爆

二重被爆は、8月6日広島、8月9日長崎に投下された両方の原子爆弾によって被爆したことを指しています。日本で初めて二重被爆者であると公式に認定された故山口彊（つとむ）氏（1916～2010）は、三菱造船の造船技師として、出張で訪れた広島で8月6日に爆発による熱と風で怪我をするとともに放射線被曝してしまいます。その後列車で家族のいる長崎へ8月8日につきますが、8月9日再度被爆します。戦後は通訳や教師を経て三菱造船に復職し働きますが、原爆症の症例としても報告されている症状の一つで、白血球が著しく減少しており、健康を損なっていました。

今回お話を掲載する福井さんは、広島で弟さん（故相川氏・長崎県）と被爆、親戚を頼って長崎へ行きますがそこで、弟さんもともに入市被爆します。福井さんも後障害で、被爆によって左耳が聞こえていません。

家族がいる、親戚を頼ってなど、いろいろな理由で壊滅状態の広島から長崎に移動し、再度被曝してしまう被害に遭いました。

二重被爆者は、長崎市発行の被爆者健康手帳を持つ1万8904人のうち、10人が両市で被爆したことを申告していますが、厚生労働省はこのことに関する調査していないため実際の人数は不明です。

福井さんと相川さんの 体験したこと

今回、青森県原水爆被害者団体協議会（青森被団協）の辻村さんのご協力で、広島と長崎2つの街で被爆した福井絹代さんから、弟の故相川国義さんが記した体験記と合わせて当時のお話を青森県生協連の加盟団体職員で聞かせていただきました。掲載の記事はその際のお話と体験記を元に当時の体験について記述しています。

1944年、父親の仕事の関係で広島に移住しました。後に父親は出征してしまい、離婚して、ひとり親だったことから福井さんと弟の国義さんは2人で生活していました。当時14才と12才でした。

原子爆弾が爆発したとき、2人は爆心地から1.8km離れたの広島市千田町の自宅におり、そこで被爆します。

「パリ、パリと雷鳴のような…音がしてから数秒後、晴天だったのが、急に夜のように暗くなりグワと物凄い熱風が吹き付けてきた…とうとう俺ん家に、爆弾が落ちたか…と、思う間もなく、体がぶあっと浮き上がった。必死で暗い中で、手足をバ

タつかせていたがその先は気を失って覚えていない」（体験記より）

爆発で自宅が倒壊してしまい福井さんは、家の下敷きになってしまいますが、弟さんが引っ張り出してくれたことから助かります。

避難する場所を求めて、市内を逃げ回り比治山公園に避難しますが、体験記によると、途中、服がドロドロに焼けタダれた皮膚が垂れ下がり体を折り曲げて奇声をあげる人や黒こげの赤ん坊を抱いて、放心状態で空を見ている軍人を見ます。

7日、知人が住む似島（にのしま）にわたりますが、似島には重症の被爆者が運ばれてきており、福井さんは患者の顔に湧いたウジをとる作業を相川さんは重湯を飲ませました。患者はもう目も鼻も口もわからない状態で、その日のうちに多くの人がなくなりました。

8日に、似島から広島駅へ移動します。広島市内は、瓦礫の山と怪我をしてうめく人、真っ黒に焦げた死体や白骨だらけでした。9日に広島駅から鉄道が運行していたことから故郷の長崎へ向かいます。

長崎駅到着前に原爆が投下され、2度目の被爆をします。道ノ尾駅（爆心地から約3.5km）手前で列車がとまったため、線路沿いを歩きで長崎駅に向かいます。途中、やけどや怪我をした人が歩

いてきて倒れて亡くなっていきました。死体を踏み越えなくてはならず、その感触が足からはなれないと福井さんは言います。

線路沿いを祖母の家がある金屋町を目指しますが、家は焼け落ちており、大浦元町にある叔母の家に泊めてもらい、翌日母の実家がある40km先の長崎県西彼杵郡黒崎村に向かいます。

母の実家には、母も金屋町の祖母もいて、広島から来たことに驚いたそうです。

戦後、結婚し旦那さんの故郷である青森に転居します。しかし、出身が長崎だと話すと蔑むような目で「ああ、ピカドンだ」と言われることがあり悲しい思いをしたこともありました。



人と馬でびっちょりな道路が

◀広島・長崎での体験をお話してくれた二重被爆者の福井絹代さん（右）。